

逍遙点描

—絵と文・中嶋嶺雄—



平壤の五月

多くの日本人は、北朝鮮の首都・平壤が北京と東京のほぼ中間に位置することなどあまり気づかずに、平壤は北京のはるか北の彼方にある遠い存在だと感じているのではなからうか。私自身にとっても、韓国のソウルには、これまで十数回も出かけているというのに、平壤はあまりにも遠いところにあった。

その私が去る四月下旬から五月の連休にかけて初めて平壤を訪れ、一週間滞在した。日本国際政治学会(東アジア分科会)訪朝団の団長としてであり、徳田教之(筑波大)、中兼和津次(東大)、小島朋之(京産大)、国分良成(慶応大)、井尻秀憲(神外大)、古田博司(下関市大)の諸氏ら、『東亜』でもおなじみの面々と御一緒した。

大同江をはさんでひらけた平壤は、金日成主席をたたえる巨大なモニュメントや高層アパート群が立ち並ぶ巨大な近代都市であり、たまたまわれわれも参加したメーデーのスタジアムなどは15万人収容とのことで、おそらく世界最大規模のものであろう。

大同江と普通江の合流点にある平壤は、その昔、「柳京」とも呼ばれただけあって、柳の緑が実に美しい都市である。過密な日程でスケッチなどする余裕がなかったけれど、同行の諸氏が買い物に行かれた合間に、普通江畔でようやくこの一枚をものすることができた。小雨がそぼふる静かな五月のひとつときであった。

(東京外国語大学教授)